

---

# コップ一杯の水

佐乃海テル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コップ一杯の水

【NZコード】

N8596A

【作者名】

佐乃海テル

【あらすじ】

通りすがりの人などがまた、一人。その通りすがりは憲明の心に何かを残していく。

通りすがりの人人がまた、一人。旅人である。

「君、水持つてるかな？」

それを聞くと憲明はコップ半分の水を渡した。

旅人は喉が相当渴いていたようで、気持ちいいくらいの音を喉から鳴らした後、

「ありがとう。なんとか持ちそうだ」

そういうて去つていった。

通りすがりの人人がまた、一人。若い女性である。

「すいません、お水ありますか？」

それを聞くと憲明はコップ半分の水を渡した。

若い女性は喉が相当渴いていたようで、見かけに似合わず一気に飲み干すと、

「ありがとうございます。どうにか生きていけそうです」

そういうて去つていった。

通りすがりの人人がまた、一人。風貌の変わった柄の悪そうな中年の男である。

「おい」

それは今までの通りすがりの人間と違う声。

「……なんでしょうか」

「なんでしょうか、だあ？　この世の中で困つてることと言つたら

水しかねえだろ馬鹿野郎！」

そういうと男は憲明を殴つた。

その男の顔は狂気に満ちていた。

2060年。経済効率を第一にしていた大抵の先進国は、絶対的な水不足に悩まされていた。水源の地に住む人間がかろうじて生きているだけで、政府関係の主要人物でさえもここでは評価されず、水を手に入れられるわけではなかつた。

政治は人間が生きられる保証があつてこそ必要なものなのだ。

この世では明日の水も保証されていない。当然水道水など機能しているはずも無く、請求も来なかつた。「金をくれるなら、水をくれ」と言わんばかりに、経済もまた成立していなくなつていた。

大抵の人は水源地まで旅をし、途中で渴き死ぬのが常だつた。憲明も普通の大学生だつた。しかし、徐々に水不足が深刻化しているのを見た彼は水源地とコンタクトを取り、1週間に1度その水源地に水をタンクに詰めてもらつていて。タンクに詰めてもらつても、電気もまたとともに機能していないのでキンキンに冷えた水など当然ながら夢のまた夢だ。むしろ水があることによつて命が保証されているだけでも贅沢なことである。そう思つて通りすがりの人々に水をコップ半分、分けてあげているのだ。

これ以上殴られたらかなわん、と思つた憲明は水をコップ一杯、入れて渡した。

「いつもはコップ半分ですから大サービスですよ」

「ふん」

不機嫌そうな返事をして、男は憲明から水を受け取つた。

癪ではあるが、この世で水取り合戦をして死んだ人間も少なくない。そう考へると「コップ一杯で他人と自分の命が救えるなら不満でもない取引か、と思つていた。

だが、男は飲み始めなかつた。

「……どうしたんですか」

しばしの沈黙の後、男は口を開けた。

「すまん、やつぱり飲めん」

「どうしてですか。先ほどまで狂気に陥っていたと言つのに」

彼は目の前にあるコップ一杯という貴重な水を前にしながら、辛い表情で答えた。

「必死になつて手に入れた水を飲んでなまじ生き残つたら、また必死になつてまで水を手に入れなければならないんだ。俺はそれが辛い。生き延びることが出来て嬉しいはずなのに、辛いんだ」

そんなの当然でしょう、と憲明は言えなかつた。今までいろいろな通りすがりの人を見てきたが、皆生き延びて、水を手に入れて、生き延びて、のサイクルを苦労してなんとかまわしている。この「水を手に入れて」のところを切ればその先のサイクルはもう無い。そう、彼は言うんだろう。

「俺は前コップ2杯の水をガブガブ飲んじました。おかげで正直なことを言つと、このコップ一杯の水でも足りなく感じるくらいだ。でもそんなことを続けていたら、この世では生きていけないんだなあ」

男はとつとつコップに口をつけることはなかつた。

「じゃあな。水ありがとな。今の俺には悪いが飲めない。まるでさ、高校の時にやつてた麻薬中毒をまた体験してるみたいだぜ、へつへ」そう言つたまま寂しい笑いを残して男はどこか遠くへ行つてしまつた。男はどこまで行つたんだろう。

彼は最後に「麻薬中毒みたいだ」と言つた。

飢えている状況では水でさえも、常習性のある麻薬と化してしまうことを憲明は実感した。今までの水を貰つていつた人と違い、男は憲明の心の中に何かを残していくような気が憲明には感じられた。

通りすがりの人ひとがまた、一人。旅人たびとである。

(後書き)

「」読べ、ありがとう」「やれこます。4つ田の短編です。

短編に至っては、なんだか「下手な鉄砲も數打ひや当たる」精神です。

それでは失礼いたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8596a/>

---

コップ一杯の水

2010年10月22日00時31分発行